

パイオニア部門 受賞者 和田 行男



■その人や状況に合わせた距離感を常に大事にしながら接する和田氏

という事象を考慮した取組みであり、結果多くの入居者が身体的にも精神的にも健康な状態を維持するに至っている。

和田氏は「二方的にしてあげる介護ではなく、その人に必要なことをする支援が大切だ」と唱え続ける。その延長線上には「働く」こともあり、認知症の人が働ける場、社会とつながることが出来る場として「注文をまちがえる料理店」を企画した。このプロジェクトは、和田氏取材するために訪れたテレビ局ディレクター・小国士郎氏との出会いから始まった。「注文をまちがえる料理店」では認知症の人が、一般的な飲食店と同じように、ホール業務を行う。イベントでは間違いや失敗は多数あったが、生き生きと働く認知症の人の姿に店内は終始和やかな雰囲気包まれた。事後のアンケートでは客として参加したほぼすべての人が間違いや失敗を「気にならない」との回答であった。このプロジェクトの成果と言えるのは「周囲の協力と理解があれば、認知症の人もサービス提供者というカタチで社会参加が可能であること」「認知症の人からサービスを受ける客の側に、将来自分が認知症になっても人間らしく生きていける勇気を与えたこと」「認知症ケア従事者に対してチャレンジする大切さを理解させたこと」が挙げられる。

自らの信念を貫いて続けてきた和田氏の活動は、認知症に対する見方、そして寛容な社会のあり方について考えるきっかけを人々に与えたと言つていいだろう。



和田 行男
Yukio Wada

株式会社 大起エンゼルヘルプ 取締役
Managing Director,
Daiki Angel Help Co., Ltd.

大阪府立今宮工業高校機械科卒業。1974年4月日本国有鉄道大阪鉄道管理局入局車両修繕に従事。1987年より介護福祉士に転身。以後、特別養護老人ホーム寮父・生活相談員などを経たのちに認知症グループホーム施設長へ就任。2003年より現職である株式会社大起(だいき)エンゼルヘルプ入社。入居・通所事業部ならびに地域包括事業担当部長として事業所を統括、施設の設計から開設まで新規立上げ等を担当。2010年には認知症介護施設 株式会社波の女(なみのおんな)の立上げに役員として参加。長年にわたり認知症ケアについて新しいアプローチを開拓し認知症の人のQOL(生活の質)、ADL(日常生活動作)の向上に貢献するとともに、書籍の執筆や自身が企画したプロジェクト「注文を間違える料理店」など認知症の理解を深める活動を行っている。

推薦者

清水 嘉与子

公益財団法人 日本訪問看護財団
理事長

石田 昌弘

参議院議員

誰もが最後まで 人生の主人公であり続けるために

生きる姿を取り戻すための支援



■所属法人介護事業所の利用者(認知症の方)と「注文をまちがえる料理店」に挑む

和田行男氏は、1974年に日本国有鉄道(現「JR」)に入社。福祉の世界へ転身するきっかけとなったのは、1982年に障がい者や高齢者に列車の旅を楽しんでもらうことを目的とする臨時列車にボランティアとして参加したことにある。参加者および関係者の生き生きとした様子にとってもやりのを感じたのであった。

転職先の岐阜県の特別養護老人ホームで介護の仕事をする。約1年後、研修で訪れた施設での経験が介護に対する考えの転機となる。この施設では、認知症の方が高い柵の中で生活していたのだ。1980年代は認知症になれば普通の生活とはかけ離れた状況で介護されるのが当たり前の時代であり、「徘徊」は問題行動とされ、施設内は全て施錠、ベッドや椅子に拘束されるケースもあった。この状況に和田氏は、「認知症であっても人間らしい普通の生活ができるのではないかと」という大きな疑問を感じ、解消すべく行動に移したのである。

和田氏は1999年から東京都初のグループホーム「こもれび」で施設長を務め、それまでの認知症ケアとは異なるさまざまなアプローチに挑戦していった。「認知症になっても最期まで、人の姿で生きていけるようにする」を信念に、グループホームでは出入口の施錠はせず、認知症の人たちは掃除や洗濯など家事を分担し、食事の献立を考え、買い物に行き、料理をするなど、自分でできるように、助け合ってできるように支援する。これは、認知症になると主体的に行動する機会が減る